

けんかの毎日

# 赤ひげ先生

釜ヶ崎の

— 本田良寛伝 —

《6》

旧制八尾中学（現府立八尾高校）に進学した良寛青年は、授業として淡路島で毎年行っていた水泳練習中に急性虫垂炎にかかり、診断が遅れたため腹膜炎を起こしてしまった。このためこの年は体調が戻らず勉強もできなかつたため、人生で2回目の落第をした。しかし、その後は体力は回復し体も大きくなり中学時代は思う存分に運動することになった。学力は下位で落第すれすれの成績だったが、その原因はけんかに明け暮れていたからだつた。

低学年時代は「校内マッチ」で決して弱い者いじめはしなかつた。硬派で決して弱い者が、けんかに明け暮れる毎日。八尾中開校以来の始末書のレコードホルダードで、武勇談は数知れな

## 恩師の叱咤激励に奮發



良寛先生の母校、大阪市立大医学部と付属病院

低学年時代は「校内マッチ」で決して弱い者いじめはしなかつた。硬派で決して弱い者が、けんかに明け暮れる毎日。八尾中開校以来の始末書のレコードホルダードで、武勇談は数知れな

3ヶ月の徹夜  
中学5年に進んだ良寛青年は、担任の三刀快夫先生から呼び出された。  
「お前は勉強せんからあ  
かんねや、お前のやるこ  
んやさかいに勉強せい。」

と見てたら何も頭が悪い  
ということは一つもない  
と叱咤激励された。これ

までは叱られてばかり  
いたが、いつからか良寛先生は1次試験に

合格した日のことを自著に  
「っぽん釜ヶ崎診療所」



加藤 若村裕氏

た良寛青年は初めて「おで紹介している。  
前は頭が悪くない」と言  
われたことに気をよく  
し、発奮した。旧制中学  
1年の教科書からやり直  
し、それまではシリから  
1、2番だった成績が卒  
業の時には中位から上位  
上がることができた。  
父から「徳島に県立医  
専後の徳島大学医学部  
ができるから、受けてみ  
てはどうか」とのアドバ  
イスに、良寛青年は約3  
ヶ月の徹夜「ガリ勉」を  
し、40倍の受験倍率を突  
破して徳島県立医專に合  
格した。

市大に転入へ

全国の癡病療養所（当時の呼称）の入所者に俳句  
を書いていると、父が階  
段をのぼたかけ上がる  
音がする。あわてて階段  
を上がるような父ではなく  
いのにおかしいなど耳を  
すませていると、「とお  
つたぞ、とおつたぞ、電  
報がきたぞ」と父の笑顔  
があらわれた

八尾高校同窓会幹事の

若村裕さんは「学生時代、  
釜ヶ崎の赤ひげ先生の存  
在は知っていましたが、  
母校の先輩とは知りませ  
んでした。誇るべき先輩  
の医療活動に献身する素  
です」と笑顔で話してい  
ます。（大山勝男）

良寛先生を紹介して  
いるバネル。八尾高  
校の同意会館

専院校後に転入学した大阪市立医專（現大阪市立大学医学部）時代に培われたが、開業後に大阪府医師会での調査広報委員会委員としての仕事の中で社会医学への開眼は大きかった。そして地元鳴野の通称「アパッチ集落」での医療活動の中で決定的なものとなつた。

そして、良寛先生の社会医療活動を支えるもう一つの原点は父の存在だった。「父は医師としての活動の他に俳人（ホトトギスの同人）として指導を行っていました。私も子どもの頃から父に連れられ、療養所を回りました。父は私の誇りであり、私はいつも、おやじに負けないような仕事をしようとして努力していました」と回想している。

（大山勝男）